湖月抄

関屋

16

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

花散里　哥によりて巻の名とせり　立花の香をなつかしみほとゝ
郭公花ちる里をたつねてそとふ　細　源氏廿四歳夏五月の事也
賢木の巻の末と同し比のことなれと六月まてゝ乃事
あるはや夕顔の比と同し此巻は賢木の巻に並て見る
えゝしら　花暁日　称名院殿御説ニ修らさの巻に隠居の本意ハ
あり此巻ハ餘情よくありて隠居のありましありてやうそ御ニ
へのうれ乃ひあれハ餘情あるへき事なるへし　抄　此人のこと此巻
まさしうて云出し事なれは花散里の上と云

人しれぬ　細　源の御心勝月抄
麗景殿の事よまくみえすいかゝと
つゝしまて　抄　故宮の御
御精心ひハいかにもかけきるす
なり
世の中の世につけてまつ
しく　細　白帖日とつゝね
そうありとしするとて
抄　故院かくれさせ玉ゐのち
まつりかるゝ事となな
るへし
麗景殿　細　桐壺の御時
の女御也宮たちもおはさりしの
ことをいひあらはす
抄　麗景殿女御　花ちる
里の姉　細　花ちるさと
御物くるし
のこと源のうちなる
麗景殿の女御の御
いもうと三君といひ
さすかに忘れもはてさせ
花ちる里を忘れを
そてさえとりもさそね
とく

人しれぬ御心つからの物思はしさはいつ
となき事なれとかく大かたの世
につけてさへわつらはしう思しみたる
ゝ事のみまされはもの心ほそく世中なへ
ていとはしうおほしならるゝにさすかな
る事おほかり麗景殿ときこえしは
宮たちもおはせす院かくれさせ給ひての
ちいよ〳〵哀なる御ありさまをたゝこの大
将殿の御心にもてかくされてすくし給
ふなるへし御おとうとの三の君うち
わたりにてはかなうほのめき給ひしなこりの
こゝろなれはさすかにわすれもはて給はす

ひとのはつる里のこ
孟 花ちる里のこゝろ おゝ此花ち
る里なども いひさゝけるに
て女のゝまりんとのこ
つきべし
のうつしらすく 細 此こそあち
る里のことなどいひたれ
すゝきて今になやとる袖
衣にかゝりつけりなるは思
ひおもふかく世るけさま也

わざとめでたし猶なをにひとのはらぬを
のこしつくしたてまつるべからむ事も此比の盃
これらく物うしらずらく世のあはれなさえ
のこおきの数とふくゝ 源の 細 いかばかりひおもふとなる もの
いかばかりひおもふよしのびつくしてさう
じれの意めづらしうるゝ雲まよわれら
絵なるよそうのはしまひかくうちやつ
て花がたをとらせなくしのびまゐらせ
むかし川の月かおちすゝよはやうちう家の
あふらかしおしくらくよくなさこと
とおりまよ志てんべてぐさわらせまさけ
しくあきさうしれかゝりれこしとまりて
かじがゝる雨かなれべまうしはしおてたい

あけまよ志てんぐ
細 和琴也 河 和琴のこと也
調ありまゝんでなりし
むかしなり琴ぞ和琴なま
ちかへてかきあらせち
といふなりや

うつゝのまのさひかぜ
桂こそ吹る風とかひ
風といふとみ由
うてひとめぐん絵し 細 此家
頭大あふりも盃ひとうひし
家かなるべし此頃川の雅
信よ出給之器業の巻よ
いとこそさしうこいをし
川の数ありかへし 晴日
かぐへよ出くさ物やめしるや
孟 久しくとかされば女の心の
さびりきんくものがめりしく
とは おどくさうさるみど云
んへ物がりつるさつく道
をよほくさくくかかるれば
おゆすき此者りを同きと
郭公の濃せく
とうちつりえぞ君のかれぬ
花なかちうりは方業ま面
結女とうけりおかくうう
こもりらく嬉とひうく 細 おか
くつうひよしいふらしりくゝ
こひかひとはふ兩へしうら
限なく濃無しく折さえと

逝ますへいかほさかなかうしの春けまひかぜよ
孟 実数祭のいろいろは葵と桂とられし
まつりのところ物月しいつくられてそこにいと
あすけるひおりしかうけ絵もでひとめる絵しや
源の あるひしく思ひおらぬ
どうやとかりひいでまかへよしさむすしへ源
ぐるよけうとおかめりしくやとかけまし
おの道でかきんこ河 雛頭と
あたじもさうぐてかやすとうひ絵かなうしも源
とくぶ源あるきそわさうかよ源しうきえ
お源の車とある門のおかへ押そうくし
源なれどの車をかしくさせまて例のされ
河 とかれたる
こ河とはいれあふ
源 とうくりえぞ思へれね時のものゝさ
中 らひし宿のさねよもん最との物かしさ居
の両乃つまよんでぬきりさとらくもこうて
細 惟光ぞ又内の女也
系を学ぶるなり

されどもあはれ堪がたくてとひなさるぞとなく
ちん厳とみがしき庵の　孟 小家八年のちんでん雅ふんわかねばみがしき庵とやうく
みがめくなるべし
孟 敏く　孟 源の仰とぞ
るつ一旅よめやうにいひて
こなくこのるすまてハあはじ
よしく
かくぶん　細 面よりの気すゞ
世は時ぶハふぶりさきとくに
源氏のうとうりし我よあるゝ
ゆかしろるてもあまく　暁同
おこゝろふまたとかり秋月
面のまゞぶれよみかねつるなる
よしく
うらゝにこゝろ
細 鐘ふるくしきさ海ども
そのにゝ惟光かんく
らん　うらゝねも　細 惟光も
いづかたはあいたり
花ありし庭の梢も元なり
今ことふしうきさねもえこ
そのまゝ　師 これ惟光くい
かん女の前よわかみがつるな
八月祭の宝しみがめさた

しかこゝろかうかれどこゝは川くらりなりさ
とりて。わせくそこゆの色けりやうなりなし
さどもあまさしてみ闇めくなるべし
女 闇くさ次こゝろふかしもハそれたる道とわ
なみ闇つるさまさん々の空ことさうしにさら
とられどよしく入へしきらねもとそいづ
とくられぬんみはめぐこくもあはれなと
惟光ん おそり、さをとつむべきなりしことく
孟白 あとあれハきもそつるりりやうのこそはよ
ねらく次の巻にあ　お五ならとももべしつとまた
いもの名残こそらうけなりし
お着世なりものゝとはんく
しのとはまゞ川みがりしいぶいろうようけるく
孟 源の御んハうつるよ名残ハうつ

逆もん惟光も本のうきねやゝんえつてとくすしみずめきて掃り出るとき
人まかれぬん　細 うつの女のらく今とうし会せみも藉りしとく　明 惟光っ宮みかれたうるを
女のねうつつふ子く　暁同
さもつてもんさ　細 惟光かんく仕形ぐ久しく同語ハぶりしあまよりしらくよらひくりて思ぐ
師 りし此女を室りとうバ源よ今うらしけて地いくんなりハつしもべきるかぞとく
さまずかなり　師 元みがれせしハ妃さみがくつさとげるは志るそりうつべきやうもあるよく
陰くしの女せら　細 大貳のひまめく是も源のあひ語し人也原氏の巻よみえたり源の
姫浣んうけ語ひし人之　花同　師 女君ハ女せらの乗姫よありし人なるべし　河 幸朝月令
日五節ノ舞ハ浄見原天皇所御也勘職ス女巻ニ
年月をへてとき　細 志るべき人とうやうよ権もとどもぐ道語よりて人の物思ひともそうとく
とれてるのいら海なく　孟 前くへんけなると
ぶしげけり。なほらやうようしあさり
のなさけをぐつく海をねみしもなく
あまさの人乃よのみりひぐさかりさそう
の用いのところとみ闇しやつき川るもさう
く人めなくさ川りみそでおそくするさ着緒を
さ緒もいとし表なりゆ川　孟 蕉景殿之　女れのれけこそ。

さその用いのとをうえ
細 世いへいでんのみつく花ち
孕里も一川よ作のかし
闇しやうらうもさうく
あいるて源のみりひあひし
ごくく人めなくあれさ
すり

らうさくらべるのかわり
細 樓ハむかしよりよつまへ
女院の昔拇路のおもかし
面白さを泣くれかに寿

むかしのれりのがたりなどきこえてしまみ 細 六月の比方らう夜の海をとひや之
はやかつきてりきらり。此日あん月さしいづる
暁月 ほどをいとゞ本ぶうるきげどもこぐらう
きしわたりてちりきちりげなのゝ月りな
何うしくすわひて。女れのれけるひのびな
これどおくませらういあり。おそしまらう 貴 労
法の名 細 桐つぼの帝此御服の祖をと思お給之
さげなりむぐれてられやうるりれ完てし
まてなりしどむろまうとなつてき
故院の出おせしく
よハ忍しうしのどかじ。志おきて
まふよつけてむりしのこともさつれお
御所の名さかく
消されてしうるきし給。消とくぶれあり 細 中川の
帝の御代さ名かき文を漬く
つかうさねのみや。おなじこ思まらるく。

いまあくくてら 細 月つかん
のるまくらえしも親ちき
元ろてう哢声か乗う
くらべるの 細 梅の香を
かろうこ何るうてひし
くまりね思ぞおまき 奥入
の花ちうきし江戸ひるが時
ゐる よまませ八九も万葉 古
哥二首を取合すら哥も
春の名それらかをり
お寿のふそ橘く昔を無
忌つまえ今出安陰あそては
故院の御代の例りて今で
たらさむべきへ合しそれ
をまろしくなひて忍ま
りりさし 卿云の織置
さふよほの中りさるまを
まて忍ひとのふまりて
つまりての 細 源の女法今法
詞くぐゆうに出るそ給申せば
忍ひのなくをあまふなら
緒るさひの出もことしとも
ろさ 明郢王 卿の女の婦
伯動り琴のこくむかふ

あるひきるよけうらじ也ほどうき種をとえ
人なつりしいよまりてくなじ。志のひや
雲 るまうらずじ給
いにまち郢の給り何とし消らるかれ
なきち里をふりねてぞそふいかしへのかを 法の詞と
まふなきなくさあかはまいげまうりとぞかね
べらきらことなうこそまざるくゝも
みずそふこゝも給これ也ほりきの世にもさ
ふまのおれば。むかりむかうもうきこ何せて
つまり地給を文物之
べきへもくなうなりゆくとまてもいま。 孟 源人奏ナ 御宴六
羅景殿ハしと つぶくをまふろきへしれく。也ほりさんぐ人
きこえくまみよ。のきさうかなり世なれど。

かくれまでも物語も曲あるさく　唯古事記を始とてなりゆきて何ハかなしきものぞそふとて
まかれどもうすぐさめても　九経語ハまされてうるかしきたくるすゞさめるへ
とおり
みかるこの世よあらこがふ　孟　法人南世よ限人ハむかしのうせハいとも姫あるへ　細　源ハあすてぞあるさ
し給まさへ昔の教ハなくゆるぎまして女院ハかやうにそ我中代ハさことおもひきれ
てやりあかたり
ゆくさうしれさせ　細　女院の浪んの弁せ　明　源の院あかさ海を名給ての女院のゑ弟く御よ
うれたりうる世ハいかかゆかるまさまれくなどいまへみや
人の語さ海ハしくるや
於源の語さ海れさぐれさ
あるらく二入の哀するさあるく
人めくあく　細　哀意をあり
のかくおる。あくへ女院の寿
なら　おぼ　機の花ち里を
うれ何かかし源のみかまかハ
抜き中へもしくされまつ。
もされしゆかなかるへし
ハいろし　細　吉浜の情けをもて
女院あるかハて　みくとかし
ハるかりしを今の代ハかう
の人もまれならしく　師さハ
あしくかの作者をされ給
つるをくしなき人あかうるを
らかみりと八余のゆかしゆかり

物をいしく哀と地かりつゞけくら名しさの
あさうしぬらしん人の情け海のしらるや。あわく　源の心
哀ぞしひよける
女院の寿
ひとめるくあれけるやとはしらびるまの
うれしそのさけつましかりけれとづらの　源まくゝゝうしとなりしとく
まくるもさへいへどん中はいしくしなら　源の人く
せらと地かしらべしらぬかしをりてみは　細　花ちる里の復まふあく
わぜしすくしのひやうまうらふうかひあく　源の人く

くふるかなり
おし給ひて　御　源の男かさあるさ海く。女院ことと心くひまつるあそのやうみとつみつころ
よわがでしあるくらハ公家語　花散の男よ源の歌家をそく　世し
つらくさども去れぬべし
細山殺のと絶ゆとも山あり
さ海あるくハ名それ給べし
とゆゑ

のぞこ給へるもがらしまるよそへてよそ
よめそれぬ情け海なれだしうきとしてす　まるもの実して気く
まぬべし。たすかやりやとれいのなかうしゝく　源の心く
うちこしあるこし地かさぬこしみはわくくする　細　源ハまかりしうしと花散里ハ思ひ給く御門
べしりかうこゝ給ふくこらりいたしかくこらくの　まよ思く　細　源の君まるまの　あり
きはまつねそかやゝさ海くまつけさく。　こさハなりまさえく　なるまゝつれてもあり
いふひるゝしと地かさえしハなられたゞぬやめく
あるくかれるとへんもおそはけをうらしつゝもぐし　こよ
まふいかりかるらけれをあひるなし。地すふ人へいざう
くむくるうく。こゝろらの世けさうしし
なし給ありつるがくらねこそやうふみらく。　まる心よりなふへ

くげすくわれまへを
細源の見くなうせ根を
ぞして女る人ハ公花散里
さいなかりしま婚語地かし
おぼらんへくふからみすら
のでくよ去うるべきハこの君
らるりし一人とみさう
それどもいあしと
細ら語のこ宿をあひる
しとせひらくらかゞす

あり〳〵画からふる傳あるかゞらなん、

人もおらせ
こよなの世のさがし
細心がありのある人とも
又こいりと云ひとく根こ深くしれも重くかゝる深の性をよう、師　世のさがとハ世のさ
らひかれ悪のさゝをさるあきらたさる元用なり
ありつる　細　中川の密の事くし　師ハ心の中深かれ密の女もふかくとらしみてあくね
しむすがのぞこゝろ人あるべししる、